

ニュー・イングランドに 新島の足跡を辿る旅

きたがき 北垣 むねはる 宗治 (大学文学部名誉教授)

写真はこの旅行に参加した多田直彦氏撮影



旧ボストン海員ホーム

文章である。しかし新島の不完全ながらも力強い英文をぜひ味わっていただきたいと私は希望する。なぜなら、同志社関係者はすべて、新島がこの時にその場所で必死になって書き上げた英文に負っているからである。ハーディー夫妻はその英文を読んで、新島を支援することを決断したからである。

具体的にはパーチェス・ストリートの

遺跡は変化する

2015年9月、30名の同志社人を六日間にわたって「ニュー・イングランドに新島の足跡を辿る旅」の案内をした。新島襄はアメリカ生活が長かっただけにボストンとその近辺の町やアーモストを中心とゆかりの地がたくさんある。私はそのすべてを訪れたわけではないが、相当の部分に足を運んでみた。そして遺跡は変化するものだと強く感じた。特に変化が激しかったのは新島の大恩人であるアルフィーアス・ハーディーの墓だった。井上勝也先生が雪の中を掘り当てて発見されたという、いわくつきの小さな白い石の墓であるが、もはやAlpheus Hardyの文字は消えていて読めない。没年の「1887」という数字がかるうじて読めるので、それだとわかるのである。一同ハーディー家の墓の前に整列し、私が代表して祈りをささげた。

その墓地はボストンの隣、ケンブリッジ市のマウント・オーバン墓地にある。この墓地は芸術的な構成になっており、日本には類例がない。「アヴェニュー」

99番にある。そのレンガ建てで五階の旧海員ホームは、現在ではLiberty Bay Credit Unionという保険会社の事務所として使われている。ところがパーチェス・ストリート自体が幹線道路アトランティック・アヴェニューの勢いに押されて消えかかっているし、現在では「99」という戸番は書かれていない。建物の真正面が有名なボストン茶会事件の現場である。そして高層建築群が左右と背後から迫りこの19世紀のレンガ建築はいつ壊されて別のビルになるとも限らない。だから私はボストンに行く度ごとに、その存在を確かめに行くことにしている。

テイラー船長の二つの墓

ワイルド・ローヴァー号のテイラー船長は新島を可愛がり、新島に「ジョー」という名前をつけた人である。船長は1869年12月11日に東ボストン港で、岸壁とフェリーの間に挟まれて事故死した。これはアーモスト大学で勉強中だった新島には大変なショックだった。テイラー船長の墓は故郷のチャタムに先ず建てら

「ストリート」「レイン」等、大小の通りにはすべて植物の名前がついている。事務所が管理していて、樹木の手入れを常時行っている。ハーディー家の墓は小高い丘の上にある。墓地の中にはチャペルがあり、小さな池もある。正門の事務所では地図がもらえるが、残念ながらハーディー家はその地図に記されるほど有名ではない。ついでながら、新島旧邸を寄附した富豪J・M・シアーズ氏とその夫人、交通事故で亡くなった一人息子の墓もこの墓地の中にあるが、今回の旅では時間の関係で行けなかった。

ボストンの海員ホーム

ここはベルリン号によって函館からの日本脱出を果たした新島が、上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換え、一年以上の航海の末にボストンに到着したのち、ハーディー氏がスポンサーになってくれるかもしれないという期待のもとに、日本を脱出してアメリカに來た理由を必死になって英語で綴った場所である。岩波文庫版『新島襄自伝』で僅か11ページの

れた。この墓をチャタムの市役所に問い合わせるなどして、苦心の末に発見したのは今回の旅行にも参加した森永長彦氏(元、同志社女子中高教諭)だった。ところが、船長はその後、ボストンのフォレスト・ヒルズ墓地に改葬された。その改葬の事情を知っていたのはセアラ・テイラー夫人だろうが、夫人もとくに亡くなっている。新島はフォレスト・ヒルズの船長の墓にセアラ夫人と一緒に参りしようとして、彼女と文通したことがわかっている。チャタムの古い方の墓が貴重であるのは、そこには船長の最初の妻、コリンダの名前が刻まれているからである。後妻のセアラとしてはチャタムの墓に割り込む余地はなく、それに船長の事故死のすぐ後に生まれた坊やがすぐに死んだので、新たな墓を求めざるを得なかったのである。井上教授の調査によると、船長と坊やは上下に重なるようにして埋葬されているという。そういうことを新島はセアラ夫人から聞いて知っていたはずである。

クーリッジ大統領の肖像画

アーモスト大学のジョンソン・チャペルは同志社人にとつての聖地である。正面向かつて右側の名譽ある場所にうつむき加減の新島の肖像画がかかっている。そしてその下に、「友愛の 光のやどり 海越えて」という、児玉実用先生（元、予科教授、文学部名譽教授）の句の銅版がはめこまれている。ところで正面向かつて左側の名譽ある場所には、長い間、アーモスト大学卒業生の中で唯一、合衆国大統領になつたカルヴィン・クーリッジ（1895年卒業生）の肖像画が掲げられていた。それが今回女性の肖像画に代わつていった。その女性はオルヴァアー（Rose R. Olvat）教授で、アーモスト大学において女性で初めて教授になつた人であり、大学の式典長（College Marshal）を務めた人である。1975年以來アーモスト大学は男女共学に踏み切つた。チャペルに肖像画が掲げられているお歴々がすべて男性であることに、アーモスト大学がこそばゆきを感じ始めたのだらうと私は想像した。ではクーリ

ッジはどこに行つたのか？ 新島のはるか上に、その肖像画を見つけた。まるで羽が生えて、空に舞い上がったかのような印象を受けた。

なお、詳細な旅行記は『同志社タイムス』に連載中である。